

近畿支部活動報告 (2024 年 11 月以降)

名前に添字のある方は女性、○ ()は期です。

2024 11/22(金)	丹波の古刹の紅葉狩り Pw (企画 加藤) 参加者 8 名 伊豫⑧、加藤⑪、加藤 s⑪、野村⑫、宇野⑮、三宅⑮、井上⑯、黒崎(22) JR 亀岡駅南口＝国道佐伯 BS～苗秀寺～神蔵寺～穴太寺～穴太口 BS＝JR 亀岡駅南口
	
2024 12/18(水)	池田城と五月山 Pw (企画 三宅) 参加者 7 名 伊豫⑧、畔山⑪、加藤⑪、加藤 s⑪、森川⑪、三宅⑮、井上⑯ 阪急池田駅～池田城址～大廣寺～望海亭跡～五月台～日の丸展望台～大文字展望台～阪急池田駅
2025 1/15(水)	奈良・薬師寺と西ノ京 Pw (企画 加藤) 雨天のため中止
2025 2/26(水)	播磨・刀田山と念仏山 Pw (企画 加藤) 参加者 11 名 伊豫⑧、篠島⑧、伊豫 a⑩、畔山⑪、加藤⑪、加藤 s⑪、宇野⑮、宇野 a ⑮、高村 c⑮、三宅⑮、井上⑯ 加古川駅＝鶴林寺＝平野東～具平塚～和泉式部供養塔～教信寺～賀古駅家跡～野口神社～東加古川駅
2025 3/19(水)	甲山八十八ヶ所巡り Pw (企画 加藤) 参加者 9 名 伊豫⑧、伊豫 a⑩、加藤⑪、森川⑪、宇野⑮、宇野 a⑮、高村 c ⑮、三宅⑮、井上⑯ JR 西宮駅北口＝甲山森林公園前～甲山八十八ヶ所巡り～神呪寺～甲山森林公園～弁天池～阪急・仁川駅
2025 4/24(水)	生駒・暗峠の古道を歩く Pw (企画 井上) 参加者 8 名 伊豫⑧、伊豫 a⑩、加藤⑪、加藤 s⑪、宇野 a⑮、鈴木⑮、三宅⑮、井上⑯ 近鉄生駒駅～生駒ケーブル駅＝(宝山寺参拝)＝生駒山頂駅～暗峠～神津嶽～枚岡神社～近鉄枚岡駅
2025 5/29(木)	大阪・太子町 Pw (企画 三宅) 参加者 10 名 伊豫⑧、伊豫 a⑩、畔山⑪、加藤⑪、加藤 s⑪、森川⑪、宇野 a ⑮、鈴木⑮、三宅⑮、井上⑯ 近鉄上ノ太子駅＝和みの広場前 BS～竹内街道～孝徳天皇陵～科長神社～推古天皇陵～叡福寺＝上ノ太子駅
2025 6/13(金)	六甲高山植物園と中華 Pw (企画 高村 c、加藤 s) 参加者 6 名 伊豫⑧、黒崎⑧、伊豫 a⑩、加藤⑪、加藤 s⑪、高村 c⑮ 六甲ケーブル下＝(交通機関)＝六甲高山植物園 (園内観察)＝(交通機関)＝春日野道駅～中華料理店
2025 10/24(金)	大阪梅田・天王寺の徒歩縦断 Pw<北部編> (企画 井上) 参加者 8 名：発表は次号 伊豫⑧、伊豫 a⑩、畔山⑪、加藤⑪、加藤 s⑪、鈴木⑮、高村⑮、井上⑯ JR 大阪～お初天神～水晶橋～適塾～取引所～高麗橋～八軒家浜～歴史博物館～難波宮跡～JR 森ノ宮駅
	
写真説明 上：苗秀寺(丹波の古刹の紅葉狩り Pw) 下：鶴林寺(播磨・刀田山と念仏山 Pw)	

支部代表・事務局の交代について

2025 年 10 月、近畿支部の代表・事務局のバトンは 5 期金岩・11 期加藤（いずれも後期高齢者）から 15 期三宅・16 期井上に渡されました。今後ともよろしくお願いいたします。

丹波の古刹の紅葉狩り Pw

・実施日 2024 11/22(金) 報告 加藤 (11 期)

11 月は紅葉狩りの季節。京都には紅葉の名所が多い。それ以上に気になるのが、人の多さだ。やはり、ほぼ自分だけの『独り占め紅葉狩り』が理想だ。『紅葉&人狩り』になってしまうのは、さすがに避けたい。京都の市中でそれを求めるのはなかなか難しいが、桂川を少し遡った亀岡まで行けば、可能である。京都に近いだけあって、それなりの古刹もあり見ごたえのある紅葉もある。

メールで参加者を募集するとともに HP にも掲示した。当初近畿支部からの参加希望が 9 名いたが、病気やケガで 6 名に減。遠路はるばる組は、名古屋の方からの野村さん、彼は丹波に長く住んでいたからか心情的に第 2 の故郷なのだろう。もう一人は金沢からの黒崎 OB 会長だった。

実施日前日、北日本は低気圧の影響で荒天が予想されたが、亀岡周辺は、好天が期待された。

集合は 10 時、JR 亀岡駅南口のバス乗り場。集合地には約 30 分前、すでに黒崎さんが着いていた。金沢は雨だったため、天候を心配していたそう。冬に向かうこの季節、日本海側の天気が悪ければ、こちらは良くなるのだ。

バスの下車地「国道佐伯」。一帯は葎田野というだけあって、田園地帯である。できるだけ田舎道を選んで歩き、無事『苗秀寺』に到着した。



苗秀寺の「龍門」は三門の最初の門だ

紅葉の中に、いきなり二本の大きな石柱が立っていた。ちょっと日本離れをしているので新興宗

教施設かなと思ったくらいである。それよりも期待以上の紅葉に目を奪われた。さらに進むと、石づくりのトンネル状の門があった。これも日本ではなじみのないものだ。

この寺は奈良時代に国分尼寺として建てられ、当初は瑜伽宗だった。平安時代に天台宗となり栄えたが、明智光秀の丹波攻めで壊滅。江戸時代には亀岡の殿様の援護を受け曹洞宗として再興。江戸中期に丹波の山城を境内とし、麓の現在地に移転、修行の寺として今日に続いている。薬医門にはそれを示す「丹山法窟」の額が掲げている。



「苗秀寺」参道の紅葉

「苗秀寺」といういかにも農村地帯に似つかわしい名称かと思ったが「叢林（そうりん）の霊苗永く無窮に秀る」にちなんだもので、中国由来の言い回しとのこと。なお、瑜伽はヨガに通じ、奈良時代の法相宗の思想的源流とされる

（私も今回の執筆調査で初めて知った語彙だ）。

やはり我々は凡夫なのか、紅葉に心を奪われ、この寺の一風変わった造りにはあまり目を向けなかった。先ほどの石柱は「龍門」、次の石造りのトンネル門が「白象門」、そして紅葉の参道坂を登りつめたところの三百年前に建てられた「医薬門」、この 3 つで三門を構えるなど、他の寺にはない独特の構造が見られた。それに気づいてカメラを向けていた仲間もいた気がするが……。

確かに、拝観は無料だし、寺も掃き清めてあった。ここには観光寺とはちょっと違う緊張感があった。そのため、自然と静かに境内を歩くことになった。拝観を終え、白象門を抜け前庭に着き、ここで昼食。やっと開放的な気分が戻ってきた。

紅葉の中に屹立する龍門。その 2 本の柱の背後に青い山が見えた。なんだか不思議ときれいな風

景だった。なんだか漢詩を思わせる風景だった。



神蔵寺の入り口に架かる「みかえり橋」

苗秀寺から神蔵寺へは田舎道を選んだ。神蔵寺の手前では開発が進んでいた。道の最後は山寺に向かう風情、それは以前と同じだった。

寺の入り口の「みかえり橋」からすでに見事な紅葉が迎えてくれた。まさに最盛期だった。山門をくぐり、本堂に進む階段下の樹齢400年という大木のイロハモミジが一番有名であるが既に散っていた。いつもこの木の紅葉は早いという。

神蔵寺は最澄が開き、本尊(重文)は延暦寺・根本中堂の薬師如来と同じ木材で彫られたといわれている。しかし、藤原時代の様式であるなど、最澄が彫ったことと矛盾もあるらしい。伝承というものはそのようなものだ。

平安時代は源氏の崇敬も深く栄えていたが、源三位頼政が平家追討に加担したため、敗戦処理の所領没収で荒廃した。だが天台宗であったため、鎌倉時代から室町時代に再び丹波随一の寺として興隆を誇ったそうだ。それも明智光秀の丹波攻めで壊滅。本尊だけは菰に包まれ本堂横の谷川に隠されることで難を逃れることができたという。



「穴太寺」の山門にて

江戸初期には一旦浄土宗となり本堂、阿弥陀

堂、鐘楼が再建される。その後、亀岡城主が妙心寺派の高僧を招き、爾後、現在に至っている。

神蔵寺を出たところから穴太寺までは、ほぼ山際沿った田舎道があり、のんびりと歩けたが、またもや地図にはない新設の農道がつけられ、ついそちらに誘導された。避けたかった県道歩きだったが、短区間といえ県道を歩くはめになった。

以前もほぼ同じ時期に、この西国の札所である穴太寺に来たことがある。同じように今回も殆ど参拝客がいなかった。朱印所の方に聞くと、時期的にも終わりとのこと。団体で来るバスツアー客のことだろうか。それだけにのんびりできたが、既に紅葉バージョンになっている我々の目からすると、見るべき紅葉があまりない寺だった。

本堂の裏に回ると大きな銀杏の木が黄色の葉を纏って立っていた。なんとも不思議な銀杏と思ったら、土筆の頭の形に剪定されていることに気づいた。下にはどっさりの黄色の葉っぱが積み重なっていた。それを手に掬って撒くと梢から落ちてきたかのようにヒラヒラと舞い落ちる。そこは誰もいない空間だったので、恥ずかしげもなく童心に返った気分で、それを何度も繰り返した。



大銀杏の黄葉で童心に帰り遊んだ

カメラにうまく収めたいが、シャッターを切るタイミングが非常に難しい。だが待てよ。とその時いいアイデアが浮かんだ。スポーツ用の連写の設定だ。やはり決定的な画像が得られた。まるで『銀杏散るなり童の頭に』句がぴったりだった。

三つの寺を巡ったことで、心の中はすっかり清められたようだった。「穴太寺門前」発のバス時刻には相当な待ち時間があつたので、近くの「穴太口」まで歩いた。昔ながらの民家と田んぼを通り抜ける道だ。愛宕山が穏やかな形をしていた。

丸一日という長い時間をかけた紅葉狩りだったが、亀岡駅に着いたのは15:45だった。

池田城と五月山Pw

・実施日 2024 12/18(月) 報告 三宅 (15 期)



「逸翁（小林一三の雅号）美術館」前にて

池田市は大阪府の北西部、大阪平野の北辺に位置し市北部は五月山などの山地が連なり南部は猪名川が流れる平野となっています。阪急が初めて住宅分譲をおこなった地らしく閑静な住宅街が広がっています。阪急創業者「小林一三」の邸宅跡は「小林一三記念館」になっています。今回のPwは五月山公園のハイキングコースを歩き最高到達地点の「日の丸展望台」315mを目指します。地元の小学生の遠足コースらしいですが我々高齢者にはどうでしょうか。

集合は阪急電車「池田駅」に10時。桑名から11期の森川さんが参加し、総勢7名です。

池田駅前のサカエマチ商店街を通り抜け10分程歩き「池田城址公園」に到着。池田城は室町時代から戦国時代にかけてこの地域を支配していた地方豪族・池田氏の居城だったそうです。日本庭園の横に中々立派な「やぐら風の展望休憩舎」があり、登ると池田市街などが一望できました。



「大広寺」境内にて、後ろが三門

池田城址から歩いて10分で五月山公園の中腹に

ある「大広寺（だいこうじ）」に到着。池田城主池田氏の菩提寺で1395年創建。曹洞宗の寺院です。ここの境内からも池田市街が眼下に望め、もみじの紅葉がまだ残っていて綺麗でした。

境内から五月山ドライブウェイに出て少し登ると、五月山ハイキングコースの「望海亭コース」入り口に到着。いよいよハイキングの始まり。いきなり急な登りを20分で修禅の場「望海亭跡」に到着。更に5分で五月台に出る。ここはドライブウェイの展望台にもなっており、大きな駐車場もあります。眼下には猪名川が流れ、六甲山をバックに伊丹から宝塚の街が見渡せます。ここで昼食休憩。日差しも暖かく素晴らしい展望を見ながらの食事は気持ち良かったです。



昼食は「五月台」からの大展望を見ながら

昼食後は「自然とのふれあいコース」を歩きます。このコースは五月山ドライブウェイに沿っており上り下りの少ない静かな森の中を歩きます。20分程で「吊り橋」に着きます。立派な10メートルほどの橋で楽しそうに渡った方もおられました。

10分ほど歩くと「五月山霊園」の駐車場。霊園を通り抜け少し登ると今回Pwの最高到達地点の「日の丸展望台」です。らせん状の高さ10メートル位の大きな塔でらせんのスロープを登ると大阪平野が一望出来ます。美しい夜景が楽しめるそうです、大阪空港が近く、飛行機の離発着が見られました。

日の丸展望台から池田市街までは「五月平高原コース」を下ります。途中「大文字焼き」の点火場所で休憩。池田市の「がんがら火祭り」として毎年8月24日に行われるそうです。江戸時代から続いているそうです。ここからの展望も素晴らしく、生駒、葛城、金剛山、六甲山まで一望できま

す。

階段状の急な坂道を30分ほど下山すると五月丘小学校到着。「小林一三記念館」の前を通り、サカエマチ商店街にある本日の最終地点「麵惣更科」へ。地元では人気の自家製麺のうどんを食べ、解散となりました。



「五月平」の休憩舎でお茶会を楽しんだ

12月にしては暖かく、紅葉もまだ残っており、気持ちの良いハイキングを楽しむことができました。

奈良・薬師寺と西ノ京Pw

・実施日 2025 1/15(水) 雨天予想のため中止

播磨・刀田山と念仏山Pw

・実施日 2025 2/26(水) 報告 加藤 (11期)

今回のPW名は「刀田山と念仏山PW」と山らしい名にしたが、実態は「刀田山鶴林寺と念仏山教信寺PW」であり、街歩きの企画である。

「刀田山鶴林寺」は、聖徳太子ゆかりの寺として知られている。寺の縁起によれば、589年、聖徳太子は播磨に住んでいたという高麗出身の僧・恵便を訪問し、教えを受けたという。太子が播磨まで足を運んだ理由が気になり、調べてみると、584年に恵便を師として、渡来人の娘たち三人が出家し善信尼・禅蔵尼・恵善尼となったことがわかった。これが日本初の僧(尼僧)の誕生であった。つまり、当時の日本には仏教の教えを受ける僧がまだ不在だったということに納得した。

その恵便も、都での仏教排斥を避けて播磨に移り住み、還俗していたというから、そのような時代であったこともわかる。もう一つは、渡来人も正式に日本人として認識されていた点も重要である。当時の近畿地方における渡来人の比率は25～50%との説もあり、これが実態だったのだ。

余談ながら、日本の神々は怒ると災いをもたらす存在とされていたようだ。災いが起こると、どの神が怒っているのかを探り、その怒りを鎮める

ための方策を講じる。それが「まつりごと」であった。宮中で祀られていた「天照大神」や「倭大國魂」ですら、宮中に束縛していることが災いの原因とされ、崇神天皇の時代に宮中の外で別々に祀られるようになった。

そうした中で、外国の神(仏)が来れば、いざこざが起こるのは当然と考えた物部氏と、仏を拝めば良きことがあると期待した蘇我氏が争ったのも、自然な流れだったのだろう。

戦によって決着をつける愚かさは、今も世界のどこかで続いている。一方で、「神」と「仏」の本質を考えると、物部氏が敗れたのもなんとなく納得できる。仏教には、理解しがたいながらも經典という理論武装が備わっていたことも、その一因かもしれない。

JR加古川駅から鶴林寺までは、時間節約のためコミュニティバスを利用した。門前には「日本仏法最初 旧四天王寺刀田山鶴林寺」の石柱が立っていた。聖徳太子といえば「法隆寺」と思われがちであるが、明治以前では四天王寺の方が聖徳太子の寺として知られていたようである。

また、この立派な伽藍にも驚かされた。鎌倉から室町期にかけての太子信仰の興隆に伴い寺が整備され、領主並みに寺も知行地を持っていたため維持も可能だったろう。



「刀田山鶴林寺山門」の前にて

主な建物は、本堂、太子堂、常行堂、護摩堂、観音堂、新薬師堂、三重塔、行者堂、鐘楼、楼門などで、そのうち6つが国宝または重要文化財に指定されている。本堂の薬師如来は60年に一度の御開帳であるため、代わりに新薬師堂が設けられてそれはいつでも見られる。江戸時代中期作とはいえ薬師三尊と十二神将の像には圧倒された。また、重文など多くの堂宇は扉が閉じられていた。

境内は広いので、約1時間半の見学時間を設けその間は自由としたが、なぜか皆がまとまって行

動していた。見物より会話が楽しいのだろう。

篠島さんが歩きに不安があるというので、1.5kmの距離ながら全員でバスに乗り、次の目的地・具平塚へ向かった。



草茫々の「具平塚古墳」

NHKの「光る君へ」にも登場した具平親王は、播磨の赤松氏の祖先とされるためか、地元ではその名をよく耳にする。具平塚は古墳であり、草刈りをすると罰が当たるという噂があるため、草が生い茂っていた。具平親王自身は恨みを残すような生涯ではなかったが、なぜここでは崇りの神になったのか不思議である。

塚から少し離れた広い道路は「高射砲道」と呼ばれている。戦時中、加古川には飛行場や兵器工場があったが、なぜか戦災は免れている。高射砲は非常に重いため、飛行場まで運ぶための道が「高射砲道」として高規格で整備されたらしい。この道を北へ進むと「西国街道」と交差する。

街道はすぐに印南野台地の上に登る。播磨地域は瀬戸内式気候に属している。台地の先にも高い山など全くない、それゆえ水に窮していた地域である。台地の先端に「下居(おりみ)の清水」が湧いていた。「播州名所巡覧図絵」にも絵入りで載っているが、水道が普及した今ではその形跡もなくそれを記した説明板だけがあった。

和泉式部の供養塔はすぐだった。説明板によると、花崗岩製、年代不詳であるが南北朝を下らない時代の完全な第1級の宝篋印塔とある。基礎の「格狭間」には蓮華を浮彫とした豪華なものであるそうだ。それも4面とも違うデザインという。愛娘小式部内侍(28歳前後)失った和泉式部が、救いを求めて書写山の性空上人を訪ねた話は有名であるが、性空上人と和泉式部の年代にズレがあり、この伝承には疑問が残る。紫式部も褒めるほどの歌人であった和泉式部、その歌の多さや伝説

的行状に心打たれたのであろうか、全国に和泉式部の墓や供養塔が建つという。ここのもその一つであろうか。

西国街道をさらに東へ行けば小さな小川が流れている。新井(しんゆ)用水と呼ばれる、加古川から水を引き印南野台地を潤してきた用水、後醍醐・村上両天皇の護持僧であり、真言密教の師でもあった文観房弘真が若い時に真言律僧として工事に携わった用水なのである。文観を通して奈良の般若寺や浄瑠璃寺が繋がる思いがする。

ここで、トイレ休憩を兼ねて中華を食べる。年齢を重ねるにつれ、企画の際に大事と思うのはトイレである。以前ならば、街歩きでも握り飯で歩いたが、トイレを考えるとレストランも悪くないと思うようになった。しかも10名近くの人数で入るのだから、確実に座れるように、正午を避けて計画する。この日は13時半で予約し、実は鶴林寺の公園で腹の足しにと少し食べてきたのだ。

いろんな料理をとってみんなで食べると思っていたら、ほぼみんな同じ麺類を注文していた。

後半は、旧野口村の道路元標の見落としから始まったが、教信寺門前の1等水準点はしっかり見えていた。



「和泉式部供養塔」にて

教信寺は、室町期には堂宇13、僧坊48を数えたが、秀吉による三木城攻めの激戦地となり、堂宇はほぼ全焼。その後復興したものの、幕末に本堂が焼失、現在の本堂は明治期に書写山の麓にあった女人堂の念仏道場を移築したものである。

山門をくぐり、左手にある「教信の墓」とされる五輪塔に手を合わせた。奈良時代にすでに念仏信仰の先駆者であった教信という人物の墓だ。

教信については、次の話が文献に載っている。

『撰津国・勝尾寺の住職であった勝如(法名: 證如、781-867)は、一切の言葉を口にしない「無言の行」を修めていた。ある時、播磨国の教信

(786-866) という者が現れ、自分は口称念仏によって今日往生できたこと、そして勝如の往生の日を予告して姿を消した。不思議に思った勝如は弟子の勝鑑を播磨に遣わしたところ、教信は山陽道の賀古駅近くに草庵を結び、妻帯し、肉体労働で生計を立てながら人々に口称念仏による極楽往生を説き、教信自身もそれを実践、教信の死も事実であったとの報告であった。これを受けて、勝如も「無言の行」を止め、以後、阿弥陀仏の念仏を称え、翌年の同じ日に往生を遂げた』と。

教信寺の縁起によれば、この逸話が都に伝わり、清和天皇（在位 850-880）が教信の徳を偲び、草庵跡に伽藍を建立して「観念寺」とした。その後、1126 年に崇徳天皇により「念仏山教信寺」と改称した。教信は奈良・興福寺で修学した学僧であったが、それを捨てて沙弥として諸国を巡ったという伝承も後に加わったようだ。教信はその後の多くの浄土教関係者に影響を与えた。



「念仏山教信寺山門」から本堂を見る

堂宇はさほど大きくないが、配置がゆったりとしていて、気分が落ち着く寺であった。

教信寺を出て、賀古駅跡へ向かった。駅ヶ池の南側の土手は、古代山陽道の痕跡とされており、駅家跡には説明板があった。すぐ近くには具平親王神社があった。親王は中世に播磨一帯を治めた村上源氏・赤松氏の祖とされているため、この地に祀られているのだろう。

足を北に向け、秀吉によって滅ぼされたとされる野口城跡へ向かった。周囲は住宅と畑に囲まれていて遺構は分かりにくかったが、近世以前の城は意外に規模が小さいことに気づかされた。

播磨地方では、居住を主とした施設を「構居」と呼び、防御施設を備えたものを「城」と区別しているが、現地の説明板には構居レベルの記述がなく、それが野口城の本丸だったのかもしれない。一方で、教信寺の僧兵も戦に加わったとされ

ており、教信寺を含めた複合的な廓（くるわ）構造が存在していた可能性も感到了。すぐ近くにある野口神社も、かつては野口城の一部だったのかもしれない。



「野口神社」でコーヒータイム

野口神社は神仏分離以前、「五社宮」と呼ばれた天台系の神仏混淆施設であり、社務所の造りが教信寺の塔頭と酷似している点が印象的だった。静かな境内で、気づけば30分ほど滞在し、伊豫コーヒ店のお世話になったのは言うまでもない。

西国街道は、大きなマンション群の敷地内で一部が消失していたが、加古川イオンの敷地内では歩道があり、街道の痕跡を辿ることができた。

最後に、『播州名所巡覧図絵』にもある足利左馬頭義氏の墓とされる五輪塔と説明板を見つけた。

ただし、足利氏の本貫地が下野国足利であることを考えると、この地に五輪塔があるのは謎である。

西国街道をさらに東へ10分ほど歩き、16時35分に東加古川駅へ到着し、解散となった。

甲山八十八ヶ所巡り Pw

・実施日 2025 3/19(水) 報告 加藤 (11 期)

「三十三ヶ所巡り」といえば、一般には「西国三十三ヶ所の観音巡り」を指す。本堂の本尊が観音菩薩でなくても、その寺の観音堂に参拝するのが通例だ。それに対して「八十八ヶ所巡り」とは、弘法大師ゆかりの「四国八十八ヶ所の寺巡り」を意味し、この場合は寺の本堂の本尊に参ることになる。

六甲山系でも特異な形をしている甲山。その山腹には「甲山のお大師さん」として親しまれている神呪寺がある。その目と鼻の先に八十八ヶ所巡りがあるとは、参加者の誰一人として知らなかった……という、不思議な場所である。

集合は10時10分、場所は JR 西宮駅の北口。

「おはようございます。明石は晴れです」とメールを送ると、「高槻は、雪が結構降ってます」「宝塚の朝もかなりの雪が降っています」との返信。天気は西から東へ移動するというのが定石、集合時刻には晴れるだろうと期待して出かけた。

集合時刻までには太陽が顔を出していた。阪神バス 10 時 17 分発に乗り、「甲山森林公園」で下車。標高約 150m も登ってくれたが、西宮市内均一区間なので 240 円だった。安い！！



「第 1 番 霊山寺」にて

バス停の近くに「第一番 霊山寺<釈迦如来>」の石仏があった。これまで何度か目にしていたが、甲山大師へ至る道しるべのような石仏で、まさか四国八十八ヶ所巡りの一部だったとは思いませんでした。そういう目で見ると、自動車道の脇に点々と石仏が並んでいる。しかも、ちゃんと番号が振られているではないか。

八十八ヶ所は寺の本尊の石仏なので、観音菩薩だけでない。さまざまな仏が登場する。また、弘法大師の石仏とセットになっているのが特徴だ。石仏は寄進によって造られたため、顔立ちや大きさがそれぞれ異なっており、それがまた味わい深くて面白い。この特徴は、ほぼ 1~2 分で次の番号に到達するので、旅は意外と早く進行する。約 20 分で「第十二番 焼山寺<虚空蔵菩薩>」まで来てしまった。自動車道の脇にあるのはここまでで、ここからは昔からの山道を辿ることになる。

「第十三番 大日寺<十一面観音菩薩>」は、多分失われたものを近年になって再興したのだろうか。随分と新しい石仏である。次の石仏へは畑の畦道を通っていくようだ。初めての人なら「これが道？」と面食らうような細道である。

「第十四番 常楽寺<弥勒菩薩>」は畑の向こうの山裾にあった。驚くのはコースの作り方だ。山裾から少しずつ高度を上げて石仏を配置しているが、道はまるで山歩きをしているかのように地形

をうまく利用している。ヘアピンカーブの山道をたどり、山頂には「第十九番 立江寺<延命地藏菩薩>」が置かれていた。しかも手の届かないような高い岩を組んだ上に置かれているので、ぼんやりしていたら見落とすかもしれない。

山といっても麓から山頂まで標高差 10 数メートルほどだが、階段も多く、歩くともっと高度差があるように感じられた。そこから S 字状に下り道がつけられており、途中の「第二十四番 最御崎寺<虚空蔵菩薩>」は、空海が修行したという「御厨人窟（みくろど）」に因んでか、石の洞窟の中に菩薩が祀られていた。さらに下り、「第二十六番 金剛頂寺<薬師如来>」で、山の反対側の山裾に下ってしまう。イノシシ除けの金網をくぐって一旦神呪寺の旧参道を横断し、さらに向かいの尾根に取りつくと「第二十七番 神峯寺<十一面観音菩薩>」が始まる。尾根の標高差は約 30m。その高さの中でトラバース気味に上下しながらの道があり、仏像が点々と置かれていた。短いながらも参道がある手の込んだ石仏もいくつかある。

この尾根の稜線には石仏が置かれているが、ここからは全く気かない。よく工夫されている配置に感心した。「第三十四番 種間寺<薬師如来>」は巨大な岩を光背のように持つ石仏だった。弘法大師像と対になっているはずだが、失われたものもある。廃仏毀釈の時代に首を折られた大師像も多く、顔と胴体が不似合いなものも見られた。



「第 40 番 観自在寺」にて

「第四十四番 大寶寺<十一面観音菩薩>」でトラバース道は終わり、再び参道を横断して向かいの尾根に取りつく。辿ると基本的に岩山から成る目神山の最高点に至る道である。「第四十五番 岩

屋寺<不動明王>」から「第五十五番 南光坊<大通智勝如来>」まではほぼ平坦な山道だが、以降は岩が混じる山登り気分が楽しめる道となる。



巨大な岩から成る「第50番繁多寺」の祠

面白いのは、「第五十番 繁多寺<薬師如来>」だ。深いゴルジュ風の岩の廊下の奥の穴に石仏が置かれている。不思議なのは「第四十八番 西林寺<十一面観音菩薩>」と「第四十九番 浄土寺<釈迦如来>」の間に「是ヨリ土佐ノ國十六ヶ所」の石柱である。両寺は松山市にあるため、なぜ土佐の国境の石柱がここにあるのだろうか。

「第五十六番 泰山寺<地藏菩薩>」からは階段を登る。藪もあり、石仏の配置が分かりづらいため見落とす可能性もある地帯だ。「第六十番 横峰寺<大日如来>」まで登ると目神山の稜線、一気に北方向の視界が広がる。六甲山から摂津の山々や宝塚市や池田市の市街地まで見渡せる。甲山と山腹の神呪寺が、極楽浄土図のように見えた。

目を西にやると、目神山のランドマークである宝塔が間近に見える。目神山頂には「第六十二番 宝寿寺<十一面観音菩薩>」があり、休憩には最高の場所だったが、すでに12時半を過ぎていたため、我々の昼食場所へ直行することにした。



「目神山」の磐座にて、眼下は阪神の市街地

昼食は、巡礼ルートから外れた目神山の磐座といわれる場所で食べることにしていた。そこは、

西宮という地名の元になった広田神社の神と関係が深いらしい。目神山の南端の崖の上に位置するため、生駒山系、葛城山系、淡路島、六甲山系まで見渡せるこの好展望地、約1時間を過ごした。

さらに巡礼道から外れたもう一か所、「牛の祠（と勝手に名付けた）」場所へ案内した。此岸がここ、六甲山と甲山がまるで彼岸に浮かぶ島ように見える。その間の樹林帯が海のように横たわり、目神山のランドマークと説明した宝塔が、海に浮かぶ灯籠のように見えたのは、私だけだろうか。

さて、ここから元の巡礼道に戻り、記念写真を撮った。道に順い目神山を下り、「第六十五番 三角寺<十一面観音菩薩>」の先で再び神呪寺の旧参道を横断した。ここが旧参道のほぼ峠である。

今度とりつくのは、先ほど山腹だけを歩いた尾根であるが、最初の「第六十六番 雲辺寺<千手観音菩薩>」から稜線歩きである。山腹にあるはずの仏像と道は、木々に隠されて見えなかった。



「役行者・前鬼・後鬼像」とともに、背後は甲山

稜線道の圧巻は、「第七十二番 曼荼羅寺<大日如来>」と「第七十三番 金倉寺<釈迦如来>」の間にある大きな花崗岩の上に置かれた「役行者と前鬼・後鬼」の像である。この辺りの重畳とした花崗岩に、自分が岩山に居ると錯覚してしまうほどだった。甲山を背景に記念写真を撮った。

稜線道は「第八十二番 根香寺<千手観音菩薩>」を最後に、自動車道に出る。道路の向こう、甲山の斜面を「第八十三番 一宮寺<聖観音菩薩>」から「第八十七番 長尾寺<聖観音菩薩>」まで歩いたが、結番は神呪寺の伽藍内だ。直接つながる道はないため、一旦、道路に戻り寺の正面から登ることになる。ここでトイレ休憩とした。

神呪寺の階段を少し上ると、早咲きの桜が咲いていた。西宮市の市花が「桜」である。そのことから、この地には珍しい桜があるらしい。この時期に咲く「今津寒桜」という品種があることは

知っていたが、確証はない。

神呪寺の階段を登り、目神山のランドマークである宝塔を確認したり、「第八十八番（結番）大窪寺<薬師如来>」と一緒に記念撮影したりで、ゆっくりと時を過ごした。階段を降りて仁王門を眺めた頃には、時刻は15時40分になっていた。



「神呪寺」の早咲きの桜

歩き足りない人もいると思い、さらに甲山森林公園を越えて歩いたが、予想以上に時間がかかり、阪急仁川駅に着いたのは17時頃だった。

生駒・暗峠の古道を歩く Pw

・実施日 2025 4/24(水) 報告 井上 (16期)

暗峠(くらがりとうげ)は奈良街道の生駒山にある峠を指す。この峠道は、奈良の都と難波を結ぶ最短コースであり、奈良時代から多くの人が行き来する場所だった。唐や朝鮮からの外国使節らもここを通ったと言う。江戸時代になると、更に人の行き来が盛んになり、大和郡山藩の本陣も峠にあった。松尾芭蕉も最期の旅でここ暗峠を越え、大坂入り。その年、有名な「旅に病んで・・・」の句を残し亡くなっている。

この奈良街道を中心に据え、わが身を考えて、重量制限を超えたボディは上りにめっぽう弱い。出来れば下り専門にしたい。ありがたいことに、ここ生駒山にはケーブルがある。近鉄と繋がって交通の便も良い。ケーブルの途中に寶山寺(ほうざんじ)もある。大阪商人が商売繁盛を願う信仰の山。「聖天さん」として親しまれる寺院だ。

まず、ここを訪ね、更にケーブルで山頂を目指し、遊園地から尾根伝いに暗峠に行き、そこを下るコースとした。このコースの最大の欠点、それは遊園地から峠を下るまでトイレがないことだ。峠に茶屋はあるが、平日は閉まってトイレが使用できない。これが我らシルバー族にとって、一番

の関心ごとである。

当日10時、近鉄生駒駅に集合した。揃って元気な笑顔がそこにあり、一安心。生駒ケーブル鳥居前駅に移動する。ブルドックの顔にデコレーションした子供向けの車両はやけに可愛い。生駒ケーブルの歴史は古い。生駒鋼索鉄道との社名で大正7年創設と言うから驚く。これから行く寶山寺への参詣の足として敷設されたと言う。それ位、寶山寺が参詣者で賑わっていたのだろう。乗り込むと10分程で寶山寺駅に到着。駅から近鉄生駒駅界隈が一望できる。ちょっとだけ登った感が湧き起こる。ここから、更に参道の階段を上る。お喋りしつつ上るので余り気にならないが、過重量の身にはこたえる。参道の両脇に古めかしい宿屋や土産物屋が軒を連ねる。そこは記憶にある昭和の匂いが今も残っている。「男はつらいよ・浪花の恋の虎次郎」の舞台にもなり、渥美清が雪駄で登った参道でもある。

坂を上り切ると寶山寺の山門が仁王立ちに迎える。惣門、中門を抜けると境内は岩山に囲まれ、堂塔が山肌にへばりついている。寶山寺は南都六宗の一つ、真言律宗の大本山である。因みに、総本山は奈良の西大寺である。次いでここが主要な寺院となっている。



「生駒山寶山寺」の本堂

ここで祀る大聖歓喜天(だいしょうかんきてん)は象の顔を模した神、現世利益(げんせりやく)をもたらし神として崇められる。そのため、大坂商人の信仰を集め、「生駒聖天さん」や「聖天さん」と呼んで、毎月1日に翌月の繁盛を願うと言う。今日は24日、まだ少し早い。象の形をした神の姿や聖天さんの好物と伝わる大根をレリーフに描いたのが、あちこちにある。とあるTV番組で大根のレリーフが幾つ見つけられるかとゲス

トに問う場面があったが、難なく幾つかは見つけられる。山腹にある奥の院に登った。そこからは堂塔が一望できる。奥の院でお賽銭を奉納、無事を祈る。



生駒ケーブル「梅屋敷駅」にて

再び生駒ケーブルで生駒山頂を目指す。山頂駅との間にある、一つ先の梅屋敷駅まで歩こうとの提案。同じ寶山寺駅に戻るのでは、新鮮味がない。即座に提案に従う。言う程の距離ではないが、上りと聞くと足が鈍る。途中踏切を渡る。ケーブルの踏切は危険。線路の中央にケーブルがある。それもむき出しのケーブルが地面から少し浮き上がり、かなりのスピードで動いているのだ。足を取られないよう慎重に横断する。

梅屋敷駅に着く。「岩屋の滝」が近くにあると案内板に記す。まだ時間の余裕もある。好きもの二人が見学に出向く。駅から少し下り、200m程の距離に大聖院と書かれた寺がある。その奥に石に開けた小さな口からちょろちょろ水が流れ出ている。これが「岩屋の滝」である。迫力に欠けるものの、信心深い人にはありがたい存在なのだろう。一礼して速やかに駅に戻った。

待つ間もなくケーブルカーが来る。10分程で山頂。山頂は開けた遊園地となっている。入園料は無料。気軽に入園でき、実にありがたい。



生駒ケーブル「梅屋敷駅」にて

中ほどの花壇には、色とりどりのチューリップが咲き乱れている。山頂近くに未だ桜が咲き誇っている。珍しさに集合写真を撮る。近くにトイレ

もある。下山するまでトイレがないことを伝え、暫しの休憩とした。この後、いくつかのアトラクション脇を素通りし、電波塔の合間を抜けると、漸く山道になる。それまで多かった人通りも、山道になると途絶える。赤土の道は雨水で挟られ、歩き辛い。ただ、なだらかな下りに、気が弾んだ。

ワンピッチで目的のパノラマ展望台に到着。有料道路の信貴生駒スカイラインを横断すると休憩所になっている。自販機が2台と屋根付きベンチが備わっている。高台の先端に位置するので、見晴らしが良い。その名の通り、概ね270°のパノラマが眼前に広がっている。奈良の平群（へぐり）盆地から大阪平野、茨木・高槻辺りまで一望できる。天気も良い。遠方の淡路島や開催中の万博辺りがくっきりと見える。ここで昼食を摂った。恒例のお菓子交換会が始まる。どれを頂いても美味しい。景色の所為なのか、卑しさの所為なのか半然としなない。パノラマを堪能し、名残惜しいがここを後にした。

歩く人も少ないのか、行く手に草が生い茂り、道が解り難い。大阪に向かう方向に道がある。先に進むと案外山道はしっかりしている。緩やかな下りで至って快調。ところどころ生駒スカイラインの車道が横に現れたが、車道脇の山道を歩く。小さな祠を過ぎると直ぐに石畳の道とぶつかった。道路わきに暗峠の碑が立つ。ここが今回のメインの目的地だった。峠には茶店があり、人がいた。電話で事前に確かめ、この日は休みと聞いていたのに、なぜと思いつつ、店員に問う。これからTVの取材があり、急遽開店したと言う。メディアが言えば店も開けるのかとの不満もあるが、今回は真にありがたい。トイレ問題が一挙に解決したからだ。飲み物は注文可能と聞き、そろそろ店に入る。天気も良いので、庭の丸テーブルを陣取る。オーダは限定的だが、好みの飲み物を注文。我らは誰が来るのか興味津々だった。待つことしばし。数人の声がする。覗くと自転車に乗った芸人らしき人物とそれを取り囲むスタッフの面々が一塊りで現れる。芸人の方は吉本所属の「まりこ・ひろゆき」と教えられた。スタッフに聞くと、5月15日、ABCテレビ「news おかえり」で放送予定と話す。撮影中、我らは普段の声も控えめにし、身も正した。撮影が余りにも長いので

スタッフにこれから出かけると伝える。表で記念撮影。まりこさんは気さくな方。これを見止めると撮影に割り込み、ポーズを決めた。



「暗峠」の茶店の前にて

後日談ではあるが、このTV番組を録画し、つぶさに見た。そして、いくら見直しても、我々の姿は全くなかった。見事な空振りである。

次に大和郡山藩の本陣屋敷跡に向かう。本陣跡は峠の奈良側、少し下った所。そこを眺めるが痕跡など見当たらない。石碑の「本陣跡」だけがその在り処を示す。当てが外れ、大阪側へ向かう。



「暗峠」の本陣跡にて

下り始め、峠の説明書きがある。峠の付近にある石畳は江戸時代からのものらしい。この石畳が歩き勝手を改善したのは間違いない。ただこれも峠付近だけで、後はアスファルト舗装の道路となる。恐らく当時はごつごつした山肌を登り下りしたのだろう。現在は国道308号線となって車も通る道となっている。通行量はそれ程多くはない。と言うより、地元車以外は殆ど走ってはいない。棚田と弘法の水を過ぎると急激な下り坂となる。いくら下りと言えども限度がある。足や膝もこたえ始める。車道の勾配ランキングで国内二番目、勾配38%の急坂である。因みに一番は、川崎市にある十番坂。勾配41%とされている。こんな急坂を上り下りしていた古人（いにしえびと）が如何に健脚だったか思い知らされた。

奈良街道の急坂から脇道に逸れる。神津嶽ふれあい広場へ行く道は緩やかな下りとなる。ふれあ

い広場に着くと東屋風の建物に心地良いベンチがある。ここで一寸休憩。残り少ない菓子を皆から分けて貰い、人心地がつく。伊豫さんのコーヒーが五臓六腑に染み渡った。ここを出ると少しだけ上りになる。神津嶽の頂上、枚岡神社の奥宮。そして、ここをやや下ると枚岡展望台に到着する。パノラマ展望台の景色に見劣りするものの、視界が開け、大阪平野が一望できる。ここが本日最後の景色と目に焼き付けた。心もそぞろに、下って暗闘峠の道にでる。ここでもかなりの急勾配。爪先に力が掛かる。

下ると直ぐに松尾芭蕉の句碑に会う。句碑に「菊の香にくらがり登る節句かな」と記されている。ただこの石碑は当初のものではない。最初の碑は、元禄7年（1694年）芭蕉の没後、芭蕉百年遠忌に地元の俳人・耒耜（らいし：注記）が寛政11年（1799年）建立した。その後、山津波で損壊、行方不明となった。明治23年に俳句仲間が集まり、建てたものがこれである。ところが破損した石碑が大正時代に見つかり、修復。近くの勧成院（かんじょういん）に大正2年（1913年）設置した。ならば、ここも見どころと足を運ぶ。

残る所は枚岡神社一つ。陽も傾き、やや焦る。枚岡神社は最も古い神社と言われ、旧社格の官幣大社に格付けられる。因みに旧官幣大社は全国65社ある。奈良・京都・大阪・和歌山・滋賀で半分を占め、大阪に5社。その一つが枚岡神社である。その枚岡神社へ向おうとするが、勧成院からの道が分からない。方向は解るが、定かでない。路地に入って行き来する内、なんとか枚岡神社に到着。



「枚岡神社」参道にて

この頃陽は落ち始めていた。受付の扉は閉じ、電灯が点る。人気のないお宮に、無事到着を伝え、御朱印札は今後の楽しみに残した。本日最後の集合写真を撮ると散会。先人が歩んだ道を踏みしめながら、やや長時間にはなったものの、歴史

を辿る一日になったのではないだろうか。

（編集者注：俳人「耒耜」については、地元の説明でも「來耜」と書かれたものが多い。これは「耒」と「來」の略字が似ていることの混同から生じた誤記。彼が農民であることから農具「耒耜」を俳号にしたと推察するのが自然であろう。）

大阪・太子町Pw

・実施日 2025 5/29(木) 報告 三宅 (15 期)

太子町。もちろん聖徳太子の太子です。大阪府南河内郡にあり生駒・金剛山地の西山麓にあり日本最古の官道と言われる「竹内街道」を東に越えると大和飛鳥に至ります。聖徳太子との関係が深い寺院や古墳が多くあります。

今回のPwは太子ゆかりの史跡巡りです。多少の上り下りがありますがほぼ平坦で私達にふさわしいウォーキングコースです。近鉄電車「上ノ太子駅」に10時集合。桑名から11期森川さんが参加し総勢10名。企画者の三宅と鈴木さんが電車の乗換を間違えぎりぎりの到着でした。



「科長神社」近くの石橋

上ノ太子駅から「太子のつてこバス」に乗って5分程で「なごみの広場前」に到着し歩き始めます。「太子町役場」前を通り「竹内街道」に入り道の駅「近つ飛鳥の里・太子」に向かいます。竹内街道沿いは古民家が並び風情があります。街道沿いにある史跡「孝徳天皇陵」に立ち寄り記念撮影。「なごみの広場」を出発して1時間程で道の駅に到着。昼食タイムです。道の駅でKさんが買われたみかんの生ジュースを皆でいただきました。

道の駅を出発して「科長（しなが）神社」に向かいます。20分で到着。八社大明神とのことです。

神社を出て長い石段を7分上ると「小野妹子墓」です。聖徳太子が建てた京都・六角堂の初代住職が遣隋使妹子で、朝夕に仏前に花を供えたそうです。これが池坊流の起こりになったとの事で、現在この塚は池坊が管理しているそうです。

次に向かうのは国指定史跡「二子塚古墳」です。

双方墳という珍しい古墳という事だったのですが整備工事中のため見学出来ませんでした。



「推古天皇陵」にて

田んぼのあぜ道を歩いて10分で「推古天皇陵」です。のどかな田んぼに囲まれた所にあります。33代日本最初の女帝で聖徳太子を摂政にし飛鳥文化を開花させました。ここで大休止。いつものように羊羹を大中小のじゃんけん分けていただきました。ここで横浜から来たという歳も似た頃の女性一人と会いました。私達が辿って来た逆コースを行くと言うので丁寧にコースガイドをされた方がおられました。

次の史跡「用明天皇陵」まで15分。31代天皇です。ここは町のすぐ近くにあり天皇陵としては最初の方形墳で周囲は空濠で囲まれた大きな古墳です。次は街道をしばらく歩き「西方院」に向かいます。

「西方院」は聖徳太子の乳母三人が太子の死後に仏門に入り建立した尼寺です。茶室に入っているんですよと言われ入りました。なんとこれが素晴らしい庭園を眺める茶室でした。無料です。ゆっくりと楽しみました。

最後は「西方院」の石段を下っていいよ今回PWの最終目的地の聖徳太子御廟「叡福寺」です。



「叡福寺」境内にて

バスの出発時刻まで一時間以上ありましたのでゆっくりと拝観出来ました。「叡福寺」は聖徳太子の墓を守護するために推古天皇が建立されたそう

で大変立派で大きな寺院です。境内には「聖徳太子御廟」(円墳)があります。太子とともに太子の母、太子妃の三骨が安置されています。(三骨一廟)。時間がたくさんありましたので皆さんそれぞれ自由に拝観のんびりしました。境内で推古天皇陵で出会った女性と偶然遭遇し歓談しました。私たちと同じようなコースを歩いて来たそうです。「叡福寺前」16時49分発の太子のってこバスに乗って「上ノ太子駅」に戻りました。



「叡福寺」参道の階段

余談ですが桑名に向かう電車には森川さんと先程の女性がお二人で乗られ帰られました。さてどんな会話をされながら帰られたのでしょうか。その他の皆さんは大阪方面の電車に乗り解散しました。

歴史、名所旧跡をたくさん楽しめる里歩きのコースだったと思います。

六甲高山植物園と中華Pw

・実施日 2025 6/13(金) 報告 加藤 (11 期)

六月というのは、体がまだ暑さに慣れていないうえに、梅雨の季節だけに天気が心配。企画者泣かせの時期とも言われる。そんなとき、救いになるのが六甲高山植物園だ。山上にあるためやや涼しく、天気が悪くなくても小回りが利く。また、園内の起伏がちょっとした登山気分を味わわせてくれる。何よりも、山野草が咲き誇るこの季節、自然相手だけに、必ず新たな発見がある。

今回の企画は、高村cさんと加藤sさんの女性コンビをお願いした。いつも事務局が企画するのでは面白みに欠ける。「やまざと」への報告書作成免除という条件提示で快く引き受けてくれた。

以前のPWを見ると、六甲ケーブル山麓駅から汗を絞りながら六甲山の南面(海側)の断層崖の急坂を登り、植物園まで歩いたこともある。別のPWでは、植物園から裏六甲を下って古寺山に咲く自生の「カキノハグサ」を見て、神鉄六甲駅まで歩

いたこともあった。いずれも結構体力を使う企画だった。そのような中で、今回は、各自の体力に合わせ、都合の良い方法で植物園に集合するとなった。歩かないで済む計画が見透かされたのか、参加希望者はいつもより少なめだった。逆に、ご無沙汰していた8期黒崎さんからは久しぶりの参加連絡があった。これは朗報。

1週間前の天気予報は「やっぱり雨か…」という具合だったが、前日には曇りながらも降水確率10%に、企画者は胸をなで下ろしたに違いない。

当日、一次集合地のJR六甲道駅には女性2人の企画者と事務局だけという不安げな集まり、植物園には11時半頃到着。ほどなくして伊豫夫妻から「すぐそこまで来ている」と携帯連絡あった。案の定、ケーブル山上駅からここまで歩いて来られたとのこと。いつもながらお元気なお二人だ。

植物園に入ると、まず「コアジサイ」がラベンダーに似た香りで迎えてくれた。私にはそう感じるのだが、「いい香り」としか言わない人もいるので、ちょっと自信がない。「シチダンカ」が、まだ若い両性花をつけていた。間もなくこの両性花が黒くなって落ち、装飾花だけになると、いかにもシチダンカらしい姿になる。両性花付きのシチダンカは今しか見られない貴重な瞬間だ。

湿地では「クリンソウ」の花がすっかり実に置き換わっていた。まだ花をつけている株もあったが、見頃は過ぎていた。「オオナルコユリ」や「ミヤマナルコユリ」はちょうど花盛り。「レンゲショウマ」は固い蕾をつけていたが、花はまだまだ先のようなだ。その代わりに、「カキノハグサ」が見事に咲いていた。「センジュガンピ」も花をつけていたし、「サンカヨウ」はブルーベリーのような色の実をつけていた。食べられるそうだが、植物園内なのでさすがに手は出せない。



カキノハグサ

12時頃には黒崎さんとも無事合流し、全員揃っ

たところで休憩舎に移動し昼食とした。仕上げは、いつもの伊豫コーヒ店主の提供による一杯。香りも味もうまい。

13時半からは植物園職員によるガイドツアーに参加。「サラサベニドウダン」の花後の実が上向きに反転するという話には、現物を見て納得。「キレンゲショウマ」はもう蕾をつけていた。レンゲショウマの後に咲くと思っていたが、今年は意外と咲くのが早いのかかもしれない。

「ニッコウキスゲ」は今は盛り。白山から移植されたものだと聞いていたので、見るたびに南竜の風景を思い出してしまう。「ハクサンハタザオ」は白山では見た記憶がないが、白山がつくとなぜか嬉しくなる。「シライトソウ」「ハマナス」「スイレン」「コウホネ」なども咲いていて、季節雑多な美しさが面白い。春の花「バイカイカリソウ」もまだ咲いていた。



黒崎さんによる特別講義（六甲高山植物園内）

「ミヤマナデシコ」「キリンソウ」「エゾムラサキ」「コマクサ」「シモツケソウ」「イブキトラノオ」「ミヤママツムシソウ」など、高山植物も豊富。六月なのに、ここではもう秋の気配が漂っている。それはないだろうと思わず笑ってしまう。

この時期の六甲高山植物園の目玉は「ヒマラヤの青いケシ」だが、私はあまり興味がない。それよりも、ここには多種の「エーデルワイス」があるのが気に入っていたが、最近は力を入れていないのか、種類が減ってしまったようだ。

ガイドの説明が終わったあと、植物分類学者の黒崎さんが、高村c、伊豫a、加藤sの女性たちに何やら講義をしていた。深い話をしているようで、話す方も聞く方も熱心なようだった。

夕食の中華はオプション企画だったが、結局全員参加。17時半到着で店を予約していたので、植物園の西門を15時50分に出発。「森の音ミュージ

アム」バス停から山上バスに乗ったが、満員で座れなかった。平日なのに珍しい。



六甲ケーブル「山麓駅」

山上バスの後は、六甲ケーブル、神戸市バス、阪急と乗り継ぎ、春日野道駅で下車し、商店街を南下。ほぼ予定通りの時刻に店に到着。三宮駅の西隣の元町駅周辺の中華も良いが、混雑を避けて東隣の春日野道駅にしたのだ。

店の中は空いていた。円卓を希望したが、6人では二階の畳部屋という。我々の年齢を考え椅子席の一階を頼んだ。6人なので、やはり大円卓ではなく、普通のテーブル席に案内された。中華だから注文品を分け合った。私は酒豚、高村さんはゴマ団子を外さなかった。何を食べたかはあまり覚えていないが、結構腹が膨れた。取り分けの小皿が回転寿司の時のように積み上がっていた。

黒崎さんは春巻きがおいしいとかで、奥様のお土産に注文。その気遣いが微笑ましい。



「聚鳳」での夕食会

19時頃に店を出て解散。これからの暑い時期は休養期間、秋の10月の企画まで、しばしの別れである。再開を期して、伊豫夫妻は阪急の駅へ、残りの4人は阪神の駅へと南北に別れた。

2023 10/30(月)	君影RGと妙号岩Pw (企画 高村c、加藤s) 参加者 8 名
	伊豫⑧、伊豫a⑩、加藤⑪、加藤s⑪、宇野a⑮、高村c⑮、三宅⑮、井上⑯
	鈴蘭台駅＝陸橋下BS～君影RG～妙号岩～縦走路～鶴越駅＝湊川駅～池長植物研究所跡～中央市場前駅
2023 11/20(月)	高槻三好山、神峯山寺紅葉Pw (企画 三宅) 参加者 10 名
	伊豫⑧、篠島⑧、伊豫a⑩、加藤⑪、加藤s⑪、赤地⑫、高村c⑮、間所m⑮、三宅⑮、井上⑯
	JR 高槻駅＝神峯山寺口BS～神峯山寺～原の登山口～三好山山頂～塚脇橋～芥川宿～JR 高槻駅
2023 12/20(水)	平城坂Pw (企画 加藤) 参加者 6 名
	篠島⑧、加藤⑪、加藤s⑪、宇野a⑮、三宅⑮、井上⑯
	近鉄奈良駅～天極堂・押上BS＝般若寺～空海寺～二月堂茶所～開山堂～南大門～奈良博物館(解散)
2024 1/31(水)	かしはら水仙郷と高尾山Pw (企画 三宅) 参加者 9 名
	伊豫⑧、伊豫a⑩、加藤⑪、森川⑪、野村⑫、宇野⑮、宇野a⑮、三宅⑮、井上⑯
	JR 柏原駅～鐔比古鐔比賣神社～登山口～夫婦岩～水仙群生地～高尾山～展望地～登山口～JR 柏原駅
2024 2/16(金)	甘南備山と一休寺Pw (企画 加藤) 参加者 11 名 2/15(木)を雨天延期
	伊豫⑧、伊豫a⑩、加藤⑪、加藤s⑪、野村⑫、宇野a⑮、鈴木⑮、高村c⑮、三宅⑮、井上⑯ 一休寺ミ: 高田⑩
	
2024 4/5(金)	明石城・花見Pw (企画 宇野) 参加者 7 名 3/28(木)を雨天延期
	伊豫⑧、黒崎⑧、篠島⑧、伊豫a⑩、宇野⑮、鈴木⑮、三宅⑮
	JR 明石駅～明石城三ノ丸～本松寺～子午線標示柱～明石城・剛ノ池～天守台～JR 明石駅
2024 4/25(木)	京都・当尾の石仏めぐりPw (企画 三宅) 参加者 11 名
	伊豫⑧、篠島⑧、伊豫a⑩、加藤⑪、加藤s⑪、野村⑫、宇野⑮、宇野a⑮、鈴木⑮、三宅⑮、井上⑯
	JR 加茂駅＝(バス)＝岩船寺～貝吹岩～わらい仏～浄瑠璃寺～大門仏谷石仏～山の家BS＝JR 加茂駅
2024 5/17(金)	六甲・シェール道Pw (企画 加藤) 参加者 9 名
	伊豫⑧、篠島⑧、伊豫a⑩、加藤⑪、加藤s⑪、宇野⑮、鈴木⑮、高村c⑮、三宅⑮
	神鉄: 北鈴蘭台駅＝(送迎バス)＝森林植物園～東門～桜谷～(シェール道)～穂高湖(一旦解散)＝摩耶山＝山麓駅
2024 6/13(木)	武庫川廃線跡Pw (企画 井上、加藤) 参加者 5 名
	加藤⑪、加藤s⑪、宇野a⑮、三宅⑮、井上⑯
	JR 武田尾駅～(武庫川廃線跡)～武庫川水管橋～西宝橋～JR 生瀬駅～浄橋寺～宝塚水管橋～宝塚駅
2024 10/9(水)	古知谷阿弥陀寺Pw (企画 加藤) 参加者 9 名
	伊豫⑧、伊豫a⑩、加藤⑪、加藤s⑪、森川⑪、野村⑫、宇野a⑮、三宅⑮、井上⑯
	